瀬戸黒の話

北大路魯山人

青空文庫

瀬戸黒だね、俺が茶碗を作るとしたら。その標準となるものは、最近見たものの中ではまずこれが良い。根強い強さに恐ろしい美しさを持っている。この強さを持つ、この美しさをもつ工人が数知れず瀬戸赤津にいるのだというが、この集落の人たちは今後なにを生んで見せることであろう。いやいやすでに純白の茶碗に豪壮単純な絵を描き、前代未聞の茶碗を作ったそうな。それが朝鮮の真似でもなく、中国の発明に拠るものでもないそうな。こうなるべきだとは思っているが、いよいよ日本の陶器界にも黎明が訪れたというものである。

日本の過去に生まれた陶器、それには白色の陶器こそないが、底力の強い無限に美しいものは多々ある。まず無釉陶にえも言われぬ立体美の数々が見られる。

古備前などに見られる美しさ、強さというものは、まことにすごいという他はない。実に良いものだ。わびとも言えれば、さびとも言える代表的な美産である。大変な土の民がいるものだ。美しい日本の国なればこそ美しいものが生まれる。それは当然なことであるが、物を前にしては理屈抜きに頭が下がる。しかし、それも今ではそれが出来ないようである。年代が下った、人が変った、年とともに人は弱くなるようだ。力の弱くなった美しさは、こたえが薄い。

瀬戸黒の堅陣な黒厚釉、これは、なかなかの工夫で、ここに到るまでが大変なことだ。自分の今後作る茶碗と言うものに教えられるものが多々ある。ありがたいことだ。手を合わして、瀬戸黒の創始者に感謝する。

考えて見れば、織田信長の気風が見えるではないか。時代というものは妙なもので、誰がどう教えなくとも、おのずと生まれざるを得なくて生まれるものだ。高麗青磁も李朝この方は生まれ出ないが、高麗時代には、あのような妙技がこともなげに無数に生まれ出たのだ。信長様についで太閤殿下の時代となったが、ご当所の性格を描き出したような鷹揚なものばかりが生まれている。時代こそ生みの親である。信長、秀吉、黒茶碗、感じが実に似かよっている。一つの時代という親が生みつけたからだ。

（昭和二十八年）

青空文庫情報

底本：「魯山人陶説」中公文庫、中央公論新社
　1992（平成4）年5月10日初版発行
　2008（平成20）年11月25日12刷発行
底本の親本：「魯山人陶説」東京書房社
　1975（昭和50）年3月
入力：門田裕志
校正：木下聡
2018年11月24日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瀬戸黒の話

北大路魯山人

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/